



巻頭言

「有機合成化学」と 「シーラカンス」をつなぐものは?

What connects “synthetic organic chemistry”
and “coelacanth”?



岡田典弘 Norihiro OKADA

東京工業大学大学院生命理工学研究科 教授

私は大学に入学してすぐ演劇部に入部した。これは私の高校（開成）の先輩の影響である。この先輩は演劇部に所属しながら東大文一から法学部に進学し、上級公務員試験に良い成績で合格し通産省に入省した秀才である。私はといえば留年を繰り返し駒場を脱出するのに4年かかった落後組である。私は演劇に参加することで、正に「生きている」という実感を味わっていた。舞台稽古のときなどは照明、効果、大道具などとの合わせでほとんど1週間くらい寝ない日が続く。何かに憑かれたような演劇への傾倒は、20歳の若者にこれが生きることだ！という啓示を与えたのである。

しかし冷静になって考えてみれば、役者で一生飯を食うわけにはいかないだろうということも容易に想像ができるのであった。役者というのは規範がなく、本人の個性だけで成り立っているような世界であるように思われ、私にそのような才能がないことは明白であった。私はエキサイトして人生を送ることを望んでいたが、それは研究の世界で得られるのではないだろうか？ 役者になれないと悟ったとき、私は研究者になりたいと心から思ったのである。研究者になれば、新しい発見にエキサイトして、まるで役者が演劇に憑かれるように、人生を送れるのではないか？ だから私は小さいときから虫が好きでといった根っからの生物学者なのではなく、人生をエキサイトして送ることを望んで意識的に自分を科学者にしたのだと思っている。

有機合成化学は好きな分野であったので、遅れを取り戻そうと必死になって勉強したことは懐かしい思い出である。卒論では十数ステップを経てテルペンの新規昆虫ホルモンを合成した。大学院の入学試験勉強中に生化学の分野の発展に魅了され、薬学系大学院に進学した。博士号を取得後1年のアメリカ留学。その後筑波大学の生物科学系の講師として赴任したが、ここで生化学者から進化学者に転身した。

きっかけになったのは私がSINE(サイン)という新しい転移因子を発見したためである。SINEは確実な系統関係を決定するために有効であるということを提唱し、このいわゆるSINE法を用いてクジラとカバが近縁であることを証明した。この発見は今では世界の進化学の教科書にも紹介されている。その後ビクトリア湖のシクリッドという熱帯魚の種形成機構に魅せられ、タンザニアを訪れるようになった。知り合いになったタンザニア水産学研究所のブワソンジ所長からシーラカンスを1頭謹呈しようという申し出があったときには本当に驚いたものである。

これまでまるで発見に引きずられるようにして分野の発展に貢献してきたが、私はこの根底には演劇部でのエキサイトが流れていると思っている。昨今のサイエンスはプロジェクト化して段々個人の顔が見えにくくなってきているが、いつでもサイエンスの根底には研究者個人のエキサイトがあるべきではないだろうか？ そして若い人に科学へのエキサイトメントを伝えることも我々の重要な使命であると思うのである。

英訳版は558ページをご参照下さい。English version, see pp 558.

© 2011 The Chemical Society of Japan